

## 医用工学部・教育課程・学習成果についての自己点検評価

### ① 授与する学位ごとに、学位授与方針を定め、公表しているか。

「医用工学部の教育課程に定められた卒業要件単位を取得し、卒業研究の論文発表を行い、以下に示される医用工学部の教育方針に鑑みて、有意義な成果を挙げたことを卒業判定会議で認められた者に、学士(工学)が授与される。

1. 医用工学者に求められる健全な人間性をそなえ、社会連帯を重んじ、自分の職務に責任を感じ、真実を偽らず、個人の尊厳を重んじる人。
2. 人と共感・協調し、自分を表現する能力を持ち、共同の目的達成に貢献し、指導的立場に立つことのできる人。
3. 自立的に学び、自分の専門分野および進路を積極的に開拓できる人。
4. 国際的なコミュニケーション能力の涵養に積極的に努め、国際的地平で医用工学の研究開発に従事できる人。」

### ② 授与する学位ごとに、教育課程の編成・実施方針を定め、公表しているか。

医用工学部では、人の健康を保ち、社会を疲弊から開放する医用工学諸分野の科学者・技術者を養成するため、以下に示した方針で教育課程を編成している。

- ・入学時に基礎学力確認試験を行い、学生一人ひとりの基礎学力達成度に応じた能力別の基礎教育を行う。基礎学力達成を目的とする「修学必須科目」は重要な卒業要件である。
- ・自立的学習支援プログラムによって、高等学校理科各科目の補習が可能である。また、このプログラムによって実験・演習科目の課題達成の援助が受けられる。
- ・専門科目では実験が重視される。実験結果のレポートの他、手書きによる予習・復習のノートの提出を求め、評価を行う。実験科目は重要な卒業要件である。
- ・三年次後期の終了後、本学部の教育課程の達成度が評価され、臨床実習と卒業研究の実施に関する可否が審査される。

### ③ 教育課程の編成・実施方針に基づき、各学位課程にふさわしい授業科目を開設し、教育課程を体系的に編成しているか。

[教育目標・学位授与方針と整合性のある教育課程の編成・実施方針の明示]

本学部では、生命医工学科および臨床工学科それぞれにおいて、臨床検査技師、臨床工学技士の国家資格を取得して、医療機関への就職をめざす教育課程を基本とし、さらに大学院を目指すキャリアデザインが可能となるような内容を用意し、その充実を図っている。

初年時においては、数理科学の基礎を扱う修学必修科目 12 単位と人間形成科目および外国語科目 8 単位以上と、実習を主とする必修科目(「工学ワークショップ I」、「工学ワークショップ II」)の履修が課される。尚、履修申告を行う上限の単位数は 24 単位に定められている。

2 年次以降、生命医工学科では、キャリアビジョンを踏まえ、臨床検査技師資格取得をめ

まず「臨床検査学専攻」と、一般企業への就職をめざす「生命医工学専攻」の二つのコースのうちいずれかを選択して就学する。コース選択は、基本的には学生個人の希望に委ねられ、初年時後期に個人面接等を行って決定するが、実質的には2年次進級時の成績がチェックポイントとなる。すなわち、「臨床検査学専攻」では、1年次終了までに、必修科目5科目以上を含む48単位以上を修得し、日常の生活態度、授業態度や出席状況が良好であることを進級条件に掲げている。また、臨床検査技師資格取得のためには、2年次以降に開講されている資格科目(自由科目)を取得することが必要である。さらに、4年次への進級においては、108単位以上修得するだけでなく、4年次配当科目である臨地実習を履修する条件として、3年次までにすべての必修科目を取得していること、「医学概論」、「臨床検査学概論」等、国家試験受験資格の獲得に必要な20科目の専門科目すべて取得していることが求められる。尚、現状では、在籍学生のほぼ90パーセントが臨床検査技師国家資格取得を志望している。一方、「生命医工学専攻」を選択する学生においても、厳格な進級条件が設定されており、1年次終了までに、36単位以上を修得し、日常の生活態度、授業態度や出席状況が良好であることを進級条件に掲げている。さらに、すべての学生実験において「生命医工学専攻」に特化した実験テーマが実施されている。さらに、4年次への進級においては、108単位以上修得が必須となる。

両専攻共々、研究をさらに進める希望を持った学生には、大学院進学が推奨される。大学院進学によって、さらに自分の関心を持つ研究の充実と、学会発表や桐蔭医用工学国際シンポジウムでの英語による研究発表を経験できるように配慮されている。

一方、臨床工学科では、4年次において「臨床実習」を実施しており、「臨床実習」の履修要件は、①「医用工学実験」「医用工学専門実験」等の3年次指定科目をすべて取得していること、②臨床実習に必要な基礎知識を習得していることを客観的に評価するために、日本生体医工学会が主催する「第二種ME技術実力検定試験」に合格していること、③日常の授業態度や出席状況、医療従事者として要求される生活マナーが良好であること、と定められている。このための補講対策として、1年生から受講可能な「第二種ME技術実力検定試験対策セミナー」を、夏季休業期間中を含めた授業以外にも開講している。さらに、国家試験を受験しない学生の教育が疎かにされることはなく、むしろ大学院進学が推奨され、4年次の卒業研究において充実した研究が行われ、桐蔭医用工学国際シンポジウムでの英語による研究発表が課せられるなど、その教育課程においても特段の配慮がなされている。

#### [学士課程教育に相応しい教育内容の提供]

本学部ではその教育課程の編成方針に基づき、教育内容を基礎から専門まで体系的に配置している。本学部で扱われる専門分野は、医療を応用目的とする工学の一分野であり、その基礎教育の重点は数理科学、物質科学および英語教育にある。従って学部教育の内容は従来の工学部における基礎教育と多くの部分で軌を一にする。

#### [科目区分、必修・選択の別、単位数等の明示]

本学部の教育カリキュラムは以下のような科目によって構成される。

一般教育科目は、修学必修科目、人間形成科目、外国語科目の3つに分類され、合計20単位以上の履修が義務付けられている。修学必修科目は、専門科目を履修するにあたり必要となる基礎的な数学・物理学・化学・生物学の学力を確保することを目的とした科目である。人間形成科目は、指導的役割を果たす社会人に求められる教養と人間性を涵養するための人文科学系科目である。履修者には特に倫理規範、関係法規等の基礎となる「倫理学」「法学」等の履修が推奨される。外国語科目は国際的な共同研究等で必要となる英語能力の涵養を目的として設定された科目である。1・2年次の「英語 I」から「英語 IV」、「英語コミュニケーション I」から「英語コミュニケーション IV」では、基礎的な読解力および会話能力が培われる。3年次に配当される「英語 V」以降の科目では、TOEIC®受験、英文マニュアル・医学関連文献の講読のための訓練等に力点を置く。

専門科目群は、工学・科学基礎科目では、工学と科学を学ぶために必須となる数学・物理学・化学および生物学の基礎を学ぶものであり、それぞれ関連する専門科目の開講年次を考慮して配当され、生命医工学科と臨床工学科に共通する。また、実験系科目群、研究関連科目群についても、1年次は両学科共通のテーマを「工学ワークショップ I」および「工学ワークショップ II」で取り扱い、物理学・化学・生物学の基礎知識と基本的な実験技術、データの取り扱い等について講義と実験を通じて学ぶ。

2年次以降は、それぞれの学科の教育方針に従って特徴的な専門科目、実験系科目等が設定されている。いずれの学科においても、必修である実験系科目の比重はきわめて大きく、履修者は与えられたすべての課題に対してレポートを提出しなければならない。さらに、生命医工学科では、専門科目、研究・国家試験関連科目、発展科目、資格科目を開講している。

専門科目は中核的医用工学諸分野を扱う科目であり、主として2年次と3年次に配当され、生物工学系科目20科目、医学系科目16科目、情報系科目4科目および医用計測系科目10科目から構成されている。研究・国家試験関連科目では、4年次に配当され、臨床検査技師国家試験対策、並びに卒業研究として各研究室における研究分野について学ぶ。発展科目は特に能力と意欲のある学生に対し設けられた科目である。「インターンシップ」、「キャリア研究」などもここに属する。資格科目は、「臨床検査技師」国家試験受験資格要件となる12科目であり、修得した単位は卒業要件の単位数に含まれないが、国家試験受験をめざす学生に対しては必修科目である。また、臨床工学科では、専門科目、研究・国家試験関連科目、発展科目、資格科目によって構成される。2・3年次の専門科目において、必修の実験系科目の比重はきわめて大きく、履修者は与えられたすべての課題に対してレポートを提出しなければならない。2・3年次の「プロジェクト研究 I」から「プロジェクト研究 VI」は、学生が自主的に目標を定め、授業時間以外の時間に自主的に研究することを推奨して設けた実験系科目である。専門科目は中核的医用工学諸分野を扱う科目であり、2年次と3年次に配当される。研究関連科目では、各研究室の研究分野について学ぶ。発展科目は特に能力と意欲のある学生に対し設けられた科目であり「インターンシップ」や「キャリア研究」も設定されている。資格科目は「臨床工学技士」国家試験受験資格要件となる科目であり、修得した単位は卒業要件の単位数に含まれないが、国家試験受験をめざす学生に

対しては必修科目である。臨床工学科には医用生体技術系 6 科目と電気・電子・応用物理系 7 科目が存在する。

[必要な授業科目の開設状況]

2010(平成 22)年度の本学部の開講科目は、総計 472 単位で、そのうち一般教育科目が 106 単位、専門教育科目が 366 単位である。留学生対象科目をここから引くと 460 単位(一般教育科目 94 単位、専門教育科目 366 単位)となる。原則として Semester 制を採用しているが、実習科目、卒業研究等については通年で実施している。授業は前期、後期ともに 15 週とし、補講も組み合わせて 15 回を基準に実施している。授業形態は、講義科目と実験・演習・実技を組み合わせ、特に実験・演習に比重を置いている。

[順次性のある授業科目の体系的配置]

修学必修科目を高等学校の教育との接続として位置づけ、1 年次に配置している。科目は共通科目と各系列の科目に体系的に整理されている。また順次性のある科目は「物理学 I」「物理学 II」のような科目名にして配置している。

**④ 学生の学習を活性化し、効果的に教育を行うための様々な措置を講じているか。**

本学部では、これまでの学生の教育経験を通じて、学生に学修内容あるいは研究内容を多数の聴衆の前で発表させるプレゼンテーションの課題が、学生の能力開発の上できわめて有効であることを経験してきた。多くの人々の前である内容を叙述しなければならない課題は、一般に学生に非常に重い課題として受け取られる。そのような課題を前にしてはじめて学生は自己の理解度の程度を意識することになり、課題の理解への強いインセンティブが与えられる。自分の理解に基づいてさらに他者にこれをいかに伝達させるかを意識する段階に達すると、学生は他者の靴の位置に自分を置いてみる、他者の立場にたって理解をシミュレーションしてみるというコミュニケーションの基本的スキルの必要を感じるようになる。このような学生の能力開発において、卒業研究発表や他職種医療連携演習における仮想医療事故問題に関するグループ討議や討議結果の発表などプレゼンテーションの訓練は大変重くかつ重要な課題となる。

また、大学の建学の精神に示された「国際交流」の課題達成の一環として、英語によるコミュニケーション能力のための教育に注力し、学生の短期留学・ホームステイを行い、英語しか話さない環境の中で生活し、留学期間中に医療関連施設見学を行い、現地で医療技術者の業務内容について学ぶプログラムを実行してきた。さらに 2006(平成 18)年度より本学主催の桐蔭医用工学国際シンポジウムを開催し、著名な海外研究者を招致し、英語によるプレゼンテーション、ディスカッションをネイティブスピーカーの前で行い、国際的なコミュニケーション能力育成の場としている。なお、このシンポジウムには本学のみではなく、東京工業大学、会津大学、東京理科大学等の他大学の大学院生・学部生も多数参加している。実施に際しては、発表者は英語の上位クラスの学生におき、英語科担任教員との緊密な連絡において実施し、さらに学生の夏期の米国ホームステイプログラムおよび

自立学習支援プログラムともリンクさせている。

#### [シラバスの作成と内容の充実]

シラバスにおいて、「履修条件(学生への要望)」を明確化している。医療技術者養成に必要な科目については、厚生労働省の基準に準じてシラバスを設定しており、講義内容はシラバスに沿って実施している。ただし、教育方法については、担当する教員により毎年見直しが行われ、学科の教育目標に沿って学生の理解度に合わせて教育方法は修正されている。「参考文献」「成績評価の方法と基準(必須項目)」「授業計画」はシラバス中に記載されているので、学生は予習をすることが可能である。

#### [授業内容・方法とシラバスとの整合性]

授業はシラバスに沿って行われることとなっており、特定の開講日の授業内容について、シラバスで確認できることになっているので、受講生はシラバスを通じて授業の内容を予習することができる。授業の最終回に行われる授業アンケートに「シラバスの記載内容が履行されたかどうか」に関する項目があり、シラバスに沿った授業が行われるべきことについて、教員はアンケート結果によって検証することができる。授業の進行にともなって、当初の授業進行に変更が生じる場合も多いが、補講期間あるいは土曜日などに補講を行うなどにより弾力的な授業を展開している。

#### [初年次教育・高大連携に配慮した教育内容]

新入生に対しては、入学時に学力試験を実施し、基礎学力についてのクラス分けを行う。修学必修科目と外国語科目については、徹底した能力別指導を行っている。例えば「数学Ⅰ」のDクラスでは、高等学校レベルの内容の修得に注力する。一方、十分な数学の基礎学力があると判断される学生には、微分・積分を学習するためのAクラスが指定される。本学では少人数教育の特徴が生かされており、学科担任は学生の初年時の成績を把握することができ、能力別の指導を行うことができる。

本学部では、設立時(2005/平成17年度)より入学者の基礎学力のレベル差の問題に直面してきた。すなわち、一部の学生は数学、化学、物理学等を高等学校で事実上履修していないか、あるいはそれに近い状態であるのに対し、他の学生は高等学校で扱われる内容に一定の達成度を持ち、意欲的に学修を進める能力を持っている。この問題の解決策として実施しているのが、自立的学習支援プログラム「インディ・カフェ」である。このプログラムでは、まず学生の自律的学習のために、学生の居場所を与える。この「インディ・カフェ」では、学生がコーヒーなどを飲みながらくつろいだ環境で、自習をしたり、参考書やインターネットで調べものをしたりすることができる。上級生のインストラクターと担当教員、専門職員が駐在しているので、学生はわからないことをこれらのスタッフに質問することができる。さらに、学生の必要に応じて基礎科目から上級生の専門科目にいたるまでのコースが設置されており、様々な内容のサポートをマンツーマンまたは少人数グループで実施している。英語、数学、物理学、化学、生物学等の基礎科目については、正規授業と連動した補習授業が実施されていて、学生は授業で理解できなかったことを質問で

き、演習問題やレポートで提出すべき考察内容まで、スタッフからヒントを得ることができ、インディ・カフェの利用者は、2016(平成 28)年度では延べ 7,601 人を数えるなど、学生の自律的学習支援プログラムとして大きな役割を果たしている。

[学生の個性を尊重しながら学習を進める為のシステム]

教員のオフィスアワーを公開し、講義時間外に質問やその他指導を受けやすくしている。一方、学科会議等では、各担当授業での出欠の状況や、提出物の提出状況などについて情報をシェアして、必要に応じて声掛けを行うと共に、指導に反映させている。さらに、担任による定期的な面談を実施し、生活、学習などについてのきめ細かい相談に応じている。

#### ⑤ 成績評価、単位認定及び学位授与を適切に行っているか。

[学位授与基準、学位授与手続きの適切性]

学位授与は所定の単位修得と卒業研究の構想発表会、中間発表会、および研究発表会などを通して各自の取組みを発表し、指導教員を含む複数の教員の審査を受けるとともに、一部の学生は外部学会での発表をこなしている。

[厳格な成績評価(評価方法・評価基準の明示)]

成績評価の基準については、科目の性質によって異なっている。最も厳しい評価基準が適用されているのは、実験・実習科目である。実験・実習科目の履修については、各実習項目への出席が基本であり、一回でも欠席のある場合は単位を修得することができない。実験・実習科目では、病気等やむを得ない理由で欠席する学生のために、主に夏期休業期間中に補講のための時間を設け、欠席した実習項目について再実習することができるように配慮している。しかし、原則として複数回欠席した項目について再実習をすることはできない。すなわち、複数の項目を欠席した学生は実験・実習科目を修得することができず、次年度に再履修をする必要が生じる。実験・実習科目での成績評価は、予習項目についてのノートの検閲、実習レポートについての評価による。

講義についての成績評価は主に定期試験による。これに出席状況と課題提出についての評価が加味される。

[単位制度の趣旨に基づく単位認定の適切性]

本学部でも検定や資格、海外語学研修、学内課外授業、インターンシップ、その他履修要項に定めたプログラムに対する単位認定を行っている。授業外学習については、本学部ではプロジェクト研究という名前で単位化されている。プロジェクト研究では、構想発表、中間発表、最終発表およびレポートの提出が一人ひとり求められ、適切に単位認定を行っている。

[既修得単位認定の適切性]

本学部における既修得単位認定については、文部科学省の定める範囲内で、入学前入学

後にかかわらず大学等の修得単位 60 単位までを卒業要件単位として認定している。

放送大学の単位や英語・体育実技、医用工学および工学に関する検定・資格なども履修要項の規定に従って単位認定される。他大学からの転入学の場合には授業科目名や単位数、該当大学などの履修要項、学生本人からの情報を元に教務担当教員が単位認定するかどうか個別に判断している。いずれの場合にも、各学科の教務担当者が確認した後、学科会議での承認を経て単位認定を行っている。

## ⑥ 学位授与方針に明示した学生の学習成果を適切に把握及び評価しているか。

[学生の学習成果を測定するための評価指標の開発とその適用]

「ライセンスの医用工学部」の標語のもと、「臨床検査技師」および「臨床工学技士」の育成を主眼とした教育方針への転換と、学科改組を機に行われた積極的な広報活動の効果により、学生募集において、応募者は着実に増加しており、本学部が社会的な需要を捉えていることを実感している。資格取得という具体的な目標を持つ目的指向性の高い学生の入学によって、学部の雰囲気は高まっており、学生と教員双方において相乗的な効果を及ぼしている。

本学と同様に「臨床検査技師」および「臨床工学技士」の育成を特徴とするカリキュラムを持つ大学は近隣に複数あり、また、さらに増加する可能性がある。国家試験受験志願者についての国家試験合格率は、好むと好まざるに関わらず、学生の学習成果を測定するための評価指標として冷厳に機能するであろう。本学部が国家試験合格実績において競合する大学の後塵を拝するようでは、本学は存続できない。本学部教員はこの認識を共有している。

国家試験受験に対応したカリキュラム内容の選択と先鋭化を図るとともに、専門学校との差別化を意識して専門科目内容を重厚化、個性化することが医用工学部教育の理想である。しかし、「ゆとり教育」の弊害を被った学生の基礎学力欠如を補うために本学の人的なリソースを全面的に注入しなければならないのが現実である。今後、卒業研究においても単なる従来型の大学教育の価値観を求めるだけでなくキャリア戦略としての付加価値を見据え、学生の基礎学力と人間力の向上にあらゆる可能な対策をとる計画である。

本学には、高等学校までの系統的な座学による教育内容に馴染めなかった学生の割合が多いことは否めない事実である。この課題に対応して、本学部では実験・実習を重視した教育カリキュラムを実施しており、その効果は着実に芽生えている。

本学部は、「臨床検査技師」および「臨床工学技士」養成のための全国的な教育評議会を通じて、国家試験受験資格が得られる大学として認知されており、医療機関から有資格者の公募情報も送付されている。両学科とも、臨床検査技師、臨床工学技士を多数世に送り出し、臨床現場で活躍している。

学生からの卒業後の自己評価については、制度化されたものはない。さまざまな分野で活躍する卒業生のコミュニティが自然に形成され、新たな卒業生のキャリアパス開拓に役立つかが、本学部の評価として問われるであろう。

⑦ 教育課程及びその内容、方法の適切性について定期的に点検・評価を行っているか。  
また、その結果をもとに改善・向上に向けた取り組みを行っているか。

これまで同様 1 年生を対象に入学時に理数系英語科目の基礎学力確認試験を実施し、その結果を基にして能力別・少人数教育を行い、基礎学力の向上に努め落ちこぼれる学生を少なくすることに成功している。また、自立的学習支援プログラム「インディ・カフェ」などによる丁寧な補習環境の充実は、学生の自己啓発と留年・退学者の防止にも役立っている。実験・実習の充実により、学生の問題発見能力と問題解決能力の開発に成功している。卒業研究を活性化することにより、学会発表が増え、本学の知名度も上がり、病院等への就職も有利に働き、また大学院進学希望者も加速するものと考えられる。

医用工学部では生命医工学科の臨床検査技師と臨床工学科の臨床工学技士の国家試験での 100%合格を重点方針として掲げている。そして、それを具現化するため、授業と実習の強化を目的に適宜、教員(専任)を採用している。さらに、実習施設の拡充のためのプロジェクトチームを編成し検討している。

教育課程の編成・実施方針の適切性については、提案された案件を学科会議において検討し、その後、教授会において審議し議決する。このようなプロセスによって必要に応じて検証している。

本学部では、2004(平成 16)年度より学部内の教務委員会が FD を実施し、学生全般に関わる教育指導の向上を目標として、「わかりやすい授業」「学修へのモチベーションを与える授業」を心がけ、その方法を工夫し、他の教員の授業を参観する機会を持って授業改善に努め、新しい試みの成果および問題点について情報交換を行ってきた。年度ごとに掲げられた FD のテーマは以下のようなものである。

- ・基礎学力試験の物理結果について
- ・授業アンケートについて
- ・2017 年度入学生学力状況

本学部は医療系国家資格の取得が 1 つの目標となっており、それに伴う様々な模擬試験や学習を実施しているため、学習のモチベーションは高い。また、少人数教育のメリットを生かし、実験・実習を重視するカリキュラムを構成している。さらに希望する学生にはプロジェクト研究などを通して個別対応を行っており、これらに参加する学生のモチベーションの向上および学力向上に繋がっている。

本学部では、早くから初年時教育を課題として取り組んできた。入学時に学力試験を行い、その結果に基づいて「数学 I」「物理学 I」等の修学必修科目、および外国語科目のクラス分けをし、能力別に徹底した少人数教育を行い、基礎学力を徹底する方法はよく定着している。また、学生に自律的な学習の環境を与え、インストラクターによって支援する「インディ・カフェ」は、年間の利用者が 7,600 名に達し、その支援内容は高校で扱われる内容の補習、専門科目履修の支援、大学院進学のための発展的内容等多岐にわたり、本学部の教育プログラムを補完するシステムとして定着している。

成績不良の学生に対しては担任教員が頻繁に面談を行い、特に学期当初においては保護



者を交えた三者面談を行っている。これにより学生のドロップアウトを未然に防いでいる。

本学部では、早くから初年時学生の基礎学力の充実に注力し、能力別の少人数教育、自律的学習支援プログラム等を通じて、成果をあげてきた。しかし、入学者の基礎学力の欠如は著しく、2年次以降の専門科目を履修するためのミニマム・リクワイアメントを一年間で達成することが困難である学生が急増している。高校の数学、理科、英語の補習を主な内容とする初年時教育の方法に抜本的な見直しを迫られているとともに、基礎学力のある学生を受け入れるための入学者選別が重要な課題となっている。

高等学校までの教育の状況や本学の募集形態の変化により、大学教育を受ける学生の基礎学力および学習能力が不十分なケースも存在する。これら学生に対しても大学として必要な教育を施すために、授業外における指導教員による補習的指導や「インディ・カフェ」での個別対応も含めた少人数教育を実施している。しかし、入学者の基礎学力レベルの低下の問題は著しく、学習に対するモチベーションを持ちながらも、これまでの学習経験の欠落から自学自習を行えない学生が増えている。授業ノートの取り方、自宅学習の取組みなどにまで踏み込んで個別指導を行っているが、本学部の人的・財政的なリソースからみて、高校教科内容の補修等、基礎学力底上げへの新たな対応は困難となっている。

現在、FDの課題となっているのは以下のような項目である。

- ① 学内で教授法に関する研究会を実施し、専任教員がFDの理念と方法について共通認識を持つことを努める。
- ② 学生による授業評価についてのアンケートを実施し、授業の目標、内容、方法などについて学生からの評価結果を得て、これを分析する。
- ③ 従来の無記名による学生アンケートは必ずしも、授業改善のためのフィードバックとして有用でないので、アンケートの手法について改善する。
- ④ 授業内容を簡略に記載したシラバスについて、その学生への有効な提示の方法、効果について再検討する。
- ⑤ 学外で開催されるFDに関する研修、フォーラム等へ積極的に参加し、情報収集するとともに、その情報を持ち帰り、学内において情報伝達のための研究会を開催するなどして資質の向上に努める。
- ⑥ 教員が作成したデジタル教材を学内のネットワークで共有し、それらを共同で改良できるよう、環境を整える。
- ⑦ 内外で試みられている先進的な教授法、学習法について、ワーキンググループを形成して情報を集め、研究会を実施するとともに、新規教育法の効果を評価する方法を検討する。

今後、国家試験合格率、および卒業生のキャリアパス開拓についての客観的成果によって社会的な評価・検証を受けることになる。学生の可能性を具体化することに学部のリソースを注入することが肝要である。具体的には国家試験対策セミナーや臨床実習の充実があげられる。FDの課題に対しては上述のような様々な問題意識を共有している。これらの教習した意識を学部のFD委員会で一つひとつ取り上げて、授業改善の充実に図る。